

# 成果報告書

## 1. 事業の題名

「 重度障害者による『地域共生社会』の実現に向けた大学相当の研究活動の場を創出するための実践研究 」
--

## 2. 委託事業の実施期間

令和元年6月7日から令和2年3月10日（火）まで

## 3. 選択した研究テーマ、追加的に実施する事業（該当欄に○を記入）

【選択した研究テーマ】（該当欄に○を記入）

(ア) 学校から社会への移行期

(イ) 生涯の各ライフステージ

該当するいずれかに○を記入すること（両方選択することも可）

【追加的に実施する事業】（実施する場合のみ、○を記入）

(ウ) ブロック別コンファレンス

→実施する場合のみ、○を記入すること（任意実施）

## 4. 委託先組織の構成

（下記①②に必要事項を記載するほか、団体等の組織図など、組織体制の全体像が分かる資料を別途添付すること。）

### ①組織の主要構成員（役員等）

氏名	所属・役職等	備考欄
土島 智幸	医療法人稲生会/社員/理事長	北海道小児科医会/常任理事
堀 公明	医療法人稲生会/社員/理事	
池田 靖明	医療法人稲生会/社員/理事	
田中 繁道	医療法人稲生会/理事	
松田 宏二	医療法人稲生会/理事	
川村 健太郎	医療法人稲生会/理事	生涯医療クリニックさっぽろ院長
松木 由理	医療法人稲生会/理事	

### ②事業推進担当者

氏名	所属・役職等	備考欄
宮田 直子	医療法人稲生会/保育士	
中安 恭平	医療法人稲生会/理学療法士	
鏡 結美	医療法人稲生会/介護福祉士	教員免許所持者

澤頭 莊子	医療法人稲生会/言語聴覚士	
伊西 夏恵	医療法人稲生会/作業療法士	前年度コーディネーター
梅村 圭	医療法人稲生会/介護福祉士/看護師	

## 5. 事業の実施に係る全体像

(連携先や再委託先までを含め、本実践研究事業の実施に係る全体像について図示すること。また、本事業全体を通じた目標の達成状況や、本事業終了後の目指す方向性等についても触れること。)

別紙参照

## 6. 事業の実施結果

### (1) 効果的な学習プログラムの開発

#### ①開発の実施経過

(具体的な内容は6.(1)②に記載すること。)

4月	
5月	
6月	委託契約締結 6/29 (土) リサーチフェローゼミ「研究テーマについて①」(講師：土島智幸)
7月	7/13 (土) リサーチフェローミーティング「研究テーマについて②」 7/25 (木) リサーチフェローミーティング「研究グループの組成について」
8月	8/10 (土) リサーチフェローミーティング「みらいづくり大学校の研究について」 8/22 (木) リサーチフェローゼミ「研究とは何か」(講師：天島大輔氏)
9月	9/7 (土) リサーチフェローミーティング「天島氏講義を振り返って」 9/26 (木) リサーチフェロー：ポーリング場への外出検証
10月	10/7 (月) リサーチフェロー研究報告会「研究活動の進捗状況報告」 10/18 (金) リサーチフェロー：社会福祉法人べてるの家視察検証 10/21 (月) 第1回重心共同研究プロジェクト 10/30 (水) リサーチフェロー研究報告会「障害者の娯楽について」
11月	11/12 (火) リサーチフェロー研究報告会「障害者の学びの継続性について」 11/29 (金) 第2回重心共同研究プロジェクト
12月	12/4 (水) リサーチフェロー研究報告会「みらいづくり大学校の今後について」 12/21 (土) リサーチフェロー懇親会
1月	1/14 (火) リサーチフェロー研究報告会「自殺、生きがいについて」 1/31 (金) 第3回重心共同研究プロジェクト
2月	2/22 (土) ブロック別コンファレンスにおいて研究報告(ポスター展示) ※第4回重心共同研究プロジェクトは感染対策により中止
3月	

#### ②具体的な内容

(効果的な学習プログラムに係る取組内容を具体的に記載すること。学習講座や活動等を開催した場合、実施スケジュールや内容、多様な者との交流や共同学習など共生社会の実現に向けた取組、障害者当事者の意見の反映や自主的な活動の促進、外部講師招聘及びボランティアスタッフ活用の有無、参加対象者のターゲット(障害種・属性・活動規模等を含む。)等を記載すること。また、結果として、効果的な学習プログラムを提示し、根拠とともに記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。)

#### ・取組内容の概要

当法人では、これまで小児在宅医療の領域において培った医療/看護/福祉/介護/生涯学習の経験知識を活かし、彼らの卒後の選択肢として、大学相当の研究機会並びに生涯学習の場を創出する際の必要な支援体制等について、2018年度から「みらいつくり大学」を研究活動および実践の場として検証してきた。事業2年目となる今年度は、「生涯の各ライフステージ」のコースにおいては、初年度の修了生(医療的ケアを必要とするなど重度の障害をもつ身体障害者)を企画運営側に迎え、これらの研究活動の更なる発展を目指したいと考えた。また、「高校から社会への移行期」コースにおいては、知的にも身体的にも最も重度であると診断され、学習の幅において個別性の高い「重症心身障害者の学び」について、そのプロセスに関わる「関係者の学び」の相互作用をふまえながらモデル例を対象に実践を展開し、それらの課題や方法論を検証したいと企画した。これらの実践をもとに重症心身障害者をも包含する「地域共生社会」の実現可能性について社会教育の観点から研究成果をとりまとめるとともに、事業の企画・実施に当たっては、特別支援学校高等部等の学習指導要領等の趣旨を踏まえ、効果的な学習プログラムの開発、実施体制や連携モデルの構築等に取り組んだ。

#### ・「生涯の各ライフステージ」コース

まず「生涯の各ライフステージ」コースでは、初年度の修了生を「リサーチフェロー」として企画運営側に迎え、1年目の講義で得られた知見に加えて「研究」という切り口で社会や自らの生活の困難をとらえ直し、新たな学びの形を検証することを目的とした。当初は「研究」という用語に抵抗感を示すものが多かったが、研究の目的や手法を学びながらまずは実践することを念頭にスタートした。

各リサーチフェローが各々の関心から研究テーマを見つけ、数多く列挙したなかでテーマを設定し、一人は複数名のグループを構成しながら1年間をかけて研究を進めた。

研究テーマには、

「障害者にとっての娯楽とは(シューターを用いてボーリングに勤しむ障害当事者にその人生における娯楽の意味を学ぶ)」

「リアル当事者目線(当事者と介護者の視野の違いをゴープロの映像で検証)」

「ベストオフトイレ(個別性の高い障害者にとって最善のトイレはそれぞれ。自分のベストオフトイレを街中で探す試み)」

「障害者の自殺(この社会では障害者は生きがいを見つけにくい。よって自殺を考える人が多いのではないかという仮説のもと、障害の有無を越えた人としての死や生きがいについて考える)」

といった生活の困難の視点に立ったテーマから人生を問うテーマまで幅広くあげられた。

研究開始後は、対象者が重度身体障害者であることから身体的な制限(体調不良、不意の入院、会場へのアクセス等)が研究の継続に困難をもたらすことも多かった。そこで、障害当事者が研究を実践し続けるうえでモチベーションを維持し続けるヒントを学ぶべく、外部

講師に天畠大輔氏（博士課程修了）を招聘し、研究で社会を変える可能性について議論を提起いただいた。そこでは、研究の可能性を共有するとともに天畠氏が介助者とともに創り上げた研究手法や研究プロセスについて多くの学びを得た。

また研究報告会も定期的で開催し、さらに SNS を活用しながら各々の研究プロセスをリサーチフェローの中で共有できる環境を重視した。今年度終盤にはブロック別コンファレンスでポスター発表を行う展示ブースを設け、配信する機会も得たが、コロナウィルス感染対策の影響でリサーチフェロー本人がその場に参加することが叶わなかったことは心残りである。以上のとおり、今年度は初めて挑戦する「研究になじむ」段階で期間満了となったが、来年度は、これらの研究を継続し、様々な形で社会や一人ひとりの生活から得られる新たな学びの重要性をより明確にしていきながらその成果を発信する具体的な方法について検討を続けたいと考えている。

#### ・「高校から社会への移行期」コース

次に「高校から社会への移行期」コースでは、重症心身障害のある 20 代の女性とその方が暮らす共同住宅の介護スタッフの方にご協力を得て「重心共同研究プロジェクト」を立ち上げた。

プロジェクトメンバーには、同じく重度の障害がありながら自立生活を送る障害当事者の方と当法人の事業推進担当者 6 名で構成した。

プロジェクトでは、昨年度の連携協議会から助言いただいた留意点をふまえ、まず「重症心身障害者の学び」および「重症心身障害者とともに学ぶ方法」について検討を重ねた。ここでは、あくまでも重症心身障害者本人が学ぶ主体ではなく、逆に学ばれる客体でもないということ。つまりそこに参加する全ての者が学ぶ主体であり、かつ学ばれる客体であるという視点を基盤にするに至り、そこに参加した全ての者の「ともに学ぶ」意識をもつことを共有した。

具体的な方法は、全 3 回実施したプロジェクトミーティングで 3 台のカメラを設置し、全参加者が被写体となり、その表情や身体の動き、発言内容を記録した。さらに、参加者同士がその時間どのように変化したと見えるか相互に記録し合い、振り返ることを続けた。

結果として、重症心身障害者の存在がひとの集団に与える何等かの影響の大きさに気づくには至ったものの、未だ厳密な検証はできていない。来年度は、これらの記録と動画の逐語録を土台にし、参加者の変化を追う質的研究を試みたいと考えている。

また、このプロジェクトのメンバーが集う上で、全参加者に共通して関心の高いテーマを設定し、今年 2 月に屋外で実証したいと考えていたところ、残念ながら新型コロナウイルスの感染対策のため中止した。来年度は、プロジェクトメンバーのみならず、そこにたまたま居合わせた周囲の人々に与える影響についても、外出時に検証を試みたいと考えている。

## (2) 連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係機関・団体等との連携モデルの構築

### ①連携協議会の構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
友田 正樹	北海道教育庁生涯学習推進局生涯学習課	継続：担当主査
津川 周一	北海道教育庁学校教育局特別支援教育課	継続：担当主査
紺野 順子	DPI 北海道ブロック会議	継続：障害当事者

宮崎 隆志	北海道大学教育学部/教授	継続：社会教育/生涯学習論
今野 邦彦	藤女子大学/准教授	継続：特別支援教育
土畠 智幸	医療法人稲生会/理事長 北海道小児科医会/常任理事	継続：医療福祉実践
松木 由理	訪問看護ステーションくまさんの手/管理者 北海道看護協会/在宅担当 職能委員	継続：在宅看護実践
橋本 達也	北海道科学大学高等学校 校長	新規：高等学校教育実践

②連携協議会事務局構成員（4. ②の担当者の兼務可。また、事務作業スタッフを除く。）

氏名	所属・役職等	備考欄
宮田 直子	医療法人稲生会	
高波 千代子	医療法人稲生会	

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制・連携モデルの構築の実施経過  
（具体的な内容は6.（2）④に記載すること。）

4月	委託契約締結。連携協議会の各構成員に打診、委嘱。第1回開催準備。 7/12（金）第1回連携協議会：当該年度の計画及びブロック別コンファレンスについて 9/10（火）第2回連携協議会 ：研究テーマ/方法の検討及びブロック別コンファレンスのテーマについて 12/4（水）第3回連携協議会 ：研究活動の進捗報告及びブロック別コンファレンス各分科会の具体的内容の検討 3/3（火）第4回連携協議会：研究活動及びブロック別コンファレンスの開催報告
5月	
6月	
7月	
8月	
9月	
10月	
11月	
12月	
1月	
2月	
3月	

④具体的な研究内容

（連携協議会における議論内容、検討結果等を記載するとともに、「どのような者と連携すると効果的な実施体制・連携が得られるか」等に関する分析・検証を行い、具体的な実施体制・連携等のモデルを提示すること。その際、自立や社会参加・就労等に関わる具体的なデータ・調査結果・事例等のエビデンスに基づく事業成果の分析・検証結果もあわせて記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

2019年度の連携協議会での主な議題は、「生涯の各ライフステージ」コースにおいては、リ

サーチフェローの進める研究のテーマをどのように設定するか、研究の意義をどのように捉えるか、また「高校から社会への移行期コース」については、そもそも重症心身障害者の「学び」をどのように捉えるべきか、プログラムをどのように構成するか、記録した動画をどのように検証すべきかといった点を中心に検討が重ねられた。

また今年度初の試みであったブロック別コンファレンスについて、社会教育を視座とした地域共生社会を目指す上での生涯学習の在り方を教育領域を越えて福祉や医療の視点から捉えなおすといった試みについて多くの示唆をいただき、第2部の分科会については、様々な主体が参加することを想定してその具体的な開催内容について多くの議論を展開いただいた。

3年目を迎える2020年度は、これら2年間のこれまで議論の蓄積を土台としながら、北海道教育委員会の想定するコンソーシアムに参画することを前提としながら、「生涯の各ライフステージ」コースにおいては、障害当事者の研究活動を、生涯学習、広くは社会教育と捉え、これら総体としての「学び」の場を当事者自らが地域に創出するその過程でどのような社会変革が起きるものか、当事者主体の「地域共生社会の実現」にはどのような可能性があるか研究プロセスを基に協議していきたいと考えている。

また、「高校から社会への移行期コース」においては、引き続き重症心身障害者の「学び」を多角的な視点で捉える手法として「重心共同研究プロジェクト」を継続し、重症心身障害当事者のみならずそこに関わる全ての者、つまりそこにある地域、広くはこの社会がどのように変化する可能性があるか、重症心身障害者自身の変化や様々な形で関わる者の意識の変遷をまとめた質的・量的データ等を分析/検証していきたいと考えている。

### (3) コーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策等の開発

#### ① コーディネーター・指導者

氏名	所属・役職等	備考欄
松井 翔惟	医療法人稲生会 生涯医療クリニックさっぽろ	以下※参照

#### ※経歴・略歴

学歴	平成23年3月 平成31年4月	北海道教育大学 教育学部札幌校 教員養成課程 卒業 北海道大学 大学院教育学研究院 修士課程 進学予定
職歴	平成23年4月 平成26年3月 平成26年4月 平成31年3月 平成31年4月	北海道洞爺高等学校 着任 北海道洞爺高等学校 離任 札幌市立緑ヶ丘小学校 着任 札幌市立緑ヶ丘小学校 離任予定 医療法人稲生会生涯医療クリニックさっぽろ 入職予定
免許・資格	平成23年3月	小学校教諭 一種免許状 取得 中学校教諭 一種免許状（家庭）取得 高等学校教諭 一種免許状（家庭）取得

#### ②開発の実施経過

（具体的な内容は6.（3）③に記載すること。）

4月	
5月	
6月	6/7（金）委託契約締結 6/10（月）第1回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省 6/29（土）リサーチフェローゼミ「研究テーマについて①」（講師：土島智幸）
7月	7/13（土）リサーチフェローミーティング「研究テーマについて②」 7/25（木）リサーチフェローミーティング「研究グループの組成について」
8月	8/10（土）リサーチフェローミーティング「みらいづくり大学校の研究について」 8/22（木）リサーチフェローゼミ「研究とは何か」（講師：天島大輔氏）
9月	9/7（土）リサーチフェローミーティング「天島氏講義を振り返って」 9/26（木）ボーリング場への外出検証 9/30（月）第2回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省
10月	10/7（月）リサーチフェロー研究報告会「研究活動の進捗状況報告」 10/18（金）社会福祉法人べてるの家視察検証 10/21（月）第1回重心共同研究プロジェクト 10/30（水）リサーチフェロー研究報告会「障害者の娯楽について」
11月	11/12（火）リサーチフェロー研究報告会「障害者の学びの継続性について」 11/29（金）第2回重心共同研究プロジェクト
12月	12/4（水）リサーチフェロー研究報告会「みらいづくり大学校の今後について」 12/21（土）リサーチフェロー懇親会/忘年会
1月	1/14（火）リサーチフェロー研究報告会「自殺、生きがいについて」 1/31（金）第3回重心共同研究プロジェクト
2月	2/22（土）共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道
3月	3/2（月）第3回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省 3/10（火）報告書提出

### ③具体的な内容

（コーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方針に係る開発結果等を記載すること。また、コーディネーター・指導者の適性や人材配置・活用のモデル等を具体的に提示すること。その際、「どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者の役割に適しているか」、「具体的にどのように配置・活動すべきか」等に関する見解もあわせて記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

初年度にあたる2018年度のコーディネーターは、重度の肢体不自由障害者及び医療的ケアを日常的に必要とする障害者を対象とした学習支援といった観点から、肢体不自由児者の療育支援に係る経験を有し、また人工呼吸器等を必要とする障害児者の身体的状況の把握、適切な環境整備のための知識と経験を有する者が中心となって連携を構築することに重点を置いて専任した。同年度の各回の講義を経て学習プログラムを円滑に遂行し得る支援体制を構築できたことから、2019年度は、より「学び」の観点に力点を置いたコーディネーターの開発を目指したいと考え、これまで教育現場で教員として勤務してきた経験を有する者を1名配置し、障害者の生涯学習及び社会教育の場の創出の必要性を顕在化させて普及啓発に

努めた。また、当該学習プログラムの内容について、連携協議会を通じて得られる特別支援学校等で築かれた様々な知見を基に修正を行い、道内外で先駆的事例を実施している事業者への視察を行いながら、当該研究において開発する学習プログラムに反映する役割を担うものとして想定した。

この点、初年度の受動的な講義及びディスカッション形式の学びから、「研究」に取り組む主体性を発揮した新たな学びの観点が取り組みに加わったことで、新たな知識を増やすことを目的とした学習スタイルではなく、自らの経験する困難やジレンマに対して考え続けるという新たな学びに対する姿勢がこの1年間でリサーチフェローや事業推進担当者と共有することができたものとする。浦河町のべてるの家、札幌市のチャレンジキャンパスさっぽろ、旭川市のカムイ大雪バリアフリー研究所等の視察に出向き、先駆的事例から新たな学習プログラムに反映すべき取組（当事者研究、演劇、スポーツ、祭り等）について示唆を得ることもできた。また、事業終盤で開催したブロック別コンファレンスでは、それらの学びの1年間の集大成として、事業内部のみならず、他の関係者とも共有することができたことに手ごたえを感じている。

今年度はリサーチフェローを含む事業内部での研究体制を構築することに専念したこともあり普及啓発活動についてはブロック別コンファレンスの実施に重きを置いていたことからその他の外部向けの展開は乏しかったともいえる。来年度は常時多くの方にアクセスいただける環境をホームページの開設を足がかりに開始し、学生や地域住民の方々とともに学び場の創設を目指したい。

#### (4) 成果等の普及

##### ①実施経過

(具体的な内容は6. (4) ②に記載すること。)

4月	
5月	
6月	
7月	
8月	
9月	
10月	
11月	
12月	
1月	
2月	2/22 (土) 共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道
3月	みらいづくり大学校専用HP開設

##### ②具体的な内容

(成果等の普及に係る取組内容を具体的に記載すること。成果報告会等のフォーラム等を開催した場合、実施スケジュールや内容、参加者のターゲット（自治体・関係団体・一般等）等を記載



すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

2019 年度の成果の普及活動としては、(5) ブロック別コンファレンス内の展示ブースに場所を設け、初年度から2年間の活動記録動画やリサーチフェローによる研究のポスターを展示した。ブロック別コンファレンスの参加者は下記のとおり幅広い領域の参加者が多く展示ブースに足を運び、熱心にスタッフの説明に耳を傾け、リサーチフェローによる研究のポスター展示を写真で撮影する参加者が多かったことから多くの関心を捉えたものと感じている。特に、「リアル当事者目線」の研究で用いた2台のゴープロの記録動画を同時に一画面に編集し直した動画が関心を集めていた。

また、3月には受託期間終了後とはなるものの、今年度準備してきた専用ホームページを開設したいと考えている。そこでは、これまでの取り組みをアーカイブ化して検索できる機能を備えるのはもちろん、今後のリサーチフェローの研究報告会やゼミナール、講義の予定等も配信しながら、これまで以上に事業の取り組みを多くの方に配信し、障害当事者のみならず、学生や地域住民を含めた活動に展開していく足掛かりにしていきたいと考えている。

#### (5) ブロック別コンファレンスの実施

##### ①実施経過

（具体的な内容は5. (5) ②に記載すること。3. (ウ)において「ブロック別コンファレンス」の実施を選択した場合、その実施経過も記載すること。）

4月	
5月	
6月	6/10 (月) 第1回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省 6/25 (火) チャレンジキャンパスさっぽろ視察/協力依頼
7月	7/23 (火) カムイ大雪バリアフリー研究所視察/協力依頼
8月	
9月	9/10 (火) 第2回連携協議会：ブロック別コンファレンスのテーマに関する検討 9/30 (月) 第2回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省
10月	10/18 (金) 社会福祉法人べてるの家視察/協力依頼 法人内で各分科会チームを発足させ、各々企画を進めた。
11月	
12月	12/4 (水) 第3回連携協議会：各分科会の具体的内容の検討
1月	参加申込受付開始
2月	2/22 (土) 共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道
3月	3/2 (月) 第3回ブロック別コンファレンス連絡会@文科省 3/3 (火) 第4回連携協議会：ブロック別コンファレンスの振り返り

##### ②具体的な内容

（ブロック別コンファレンスの取組内容を具体的に記載すること。実施スケジュールや内容、参加者のターゲット（自治体・関係団体・一般等）を明確にした上で、具体的に記載すること。（参

加者実績については、下記表を参考に記載すること。) なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。)

今年度、「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 北海道」を2020年2月22日(土)に開催した。

- ・テーマは「社会教育の実践を通じたコミュニティの可能性」と設定し、「ともに学ぶ」という意味合いでの協同の学びを重視し、コミュニティの多義性/多様性を参加者に体験してもらうことを念頭においた。
- ・参加者のターゲット：上記テーマのもと、教育分野はもちろんのこと、より広い領域の者が興味関心を得ることを目的とし、地域で共生社会を目指した活動を展開する福祉領域の実践者も登壇者として招聘した。実際のところ下記のとおり、これまで生涯学習に携わったことのない一般からの参加が多く、その中には、医療や福祉の関係者が多く参集し、広い意味での社会教育のネットワーク形成の足がかりにできたと考えている。
- ・実施スケジュール及び内容：第1部シンポジウムの登壇候補者に6月の時点で声掛けし、内諾を得るとともに日程調整を進めた。また第2部分科会の協力者に対しては6月から10月にかけて視察を実施しながら協力依頼を進めた。9月、12月の連携協議会においては、具体的な開催案を事務局から提示し、それに対する多彩なご助言をいただき、特に分科会の内容については社会教育の視点及び特別支援教育の視点から多くの示唆を得ることができた。
- ・2月22日(土)はコロナウィルス感染対策の影響を受けて参加者が減少することが見込まれたが、計2回に渡り事前にメールで参加者へ感冒症状のある方には参加を見送ることを依頼し、代替手段としてWeb配信を提供したところ延べ25名の利用があった。
- ・今回の参加者は企画の狙いどおり社会教育の広い意味合いでのネットワーク形成に資する幅広い参加者を募ることができた。一方で、公民館や図書館等、既存の生涯学習施設の職員等の参加が乏しかった。今回、北海道教育委員会及び札幌市教育委員会を通じて関係機関に周知されていたものの、社会教育の実の担い手が足を運びネットワークの構成に携わる環境を創設するうえでは更なる仕掛けが必要であり、今後の課題といえる。

(A) 参加者の属性について

	合計 (人)
<b>属性別参加者数</b>	177
(内訳)	
1 行政関係者 (教育委員会)	22
2 行政関係者 (首長部局)	5
3 学校教育関係者 (大学等関係者を除く)	6
4 大学等関係者	13
5 公民館等社会教育施設関係者	0
6 社会福祉法人関係者	不明
7 NPO法人関係者	不明
8 企業関係者 (商工会等含む)	0

9 保護者団体関係者(親の会・手をつなぐ育成会等含む)	23
10 その他一般参加者	62
11 運営事務局関係者	52

(B) メディアインパクト(報道等での周知状況)

	件数
新聞	0
ラジオ	0
テレビ	0

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

## 7. 本実践研究事業の実施により得られた成果・効果

(自立や社会参加・就労等に関する具体的なエビデンスに基づく成果・効果)

(事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット)

※数値を用いる等して具体的に記載すること

「生涯の各ライフステージ」コース

- ・ リサーチフェローが発表形式で研究報告を行った件数：5件
- ・ リサーチフェローがポスター展示で研究報告を行った件数：1件
- ・ 研究チームが組成された数：5件

「高校から社会への移行期」コース

- ・ 重症心身障害者1名と重度障害者1名および事業推進担当者6名と共にプロジェクトチームを組成。
- ・ プロジェクトミーティングの件数：3件（重症心身障害者の参加回数：全3回）
- ・ 記録動画の撮影回数：3件（計8時間）

(事業の実施により終了後（中長期的）に得たい成果／アウトカム目標)

※数値を用いる等して具体的に記載すること

「生涯の各ライフステージ」コース

- ・ 障害当事者による研究論文の執筆/投稿
- ・ 当事者団体の活動に参加する若年層の障害当事者の増加
- ・ 障害当事者自ら政策形成に携わる機会の増加
- ・ 障害当事者のみならず地域の学生や住民とともに研究を通じて学びあう場の創設

「高校から社会への移行期」コース

- ・ 高校卒業後の自宅ないしは生活介護事業所以外の生活の場の構築
- ・ 重症心身障害者の学びを検討する上で基盤となる概念の構築